# 「日本語は乱れている:9割」時代の実相

~日本語のゆれに関する調査(2013年3月)から②~

メディア研究部 塩田雄大/滝島雅子

2013 (平成25) 年3月におこなった [日本語のゆれ調査 | の報告の2回目である。

- ▼ ニュースの中で「客」と言うべきか「お客」と言うべきかの判断は、そのニュースの内容によって異なるという人が、 4分の1程度を占めている。
- ▼「見れる・食べれる」などの言い方は、1800年代末には使われ始め、これに対する違和感が1940年代にすでに指摘されており、1980年代には「ら抜きことば」という包括的な言い方がなされている。
- ▼「食べれない」などの言い方が「変だと思う」かどうかの判定については、年代差はさほど強くは表れず、学歴による違いが大きい。また、若いころには許容していても年をとると違和感が増してくるという「加齢による保守化」が見られる。
- ▼ NHK での日本語の使い方に関する意見や、日本語は非常に乱れているという意識については、年代差がはっきりと見られる。
- ▼自分では「ら抜き」を使うけれども、NHKでは使ってほしくないという人が、少なからず存在するものと推定される。

「来ることができる」ということを言いあらわ そうとするとき、「来られる」と言うのが規範的 であるが、「来れる」と言うことも一般には多い。 このように、同じ内容のもの・ことを表現する のに複数の言い方・書き方などが一つの時代・ 一つの社会で共存していることを、「ことばのゆ れ」と呼ぶ。

本稿では、2013 (平成25) 年3月におこなった「日本語のゆれ調査」(39項目、全国満20歳以上の男女1,241人回答、詳細は先月号稿末の単純集計表参照)の結果のうち、特に興味深い傾向を示した項目について、先月号に引き続き報告する。

今回の稿は、第1章を滝島が、それ以降の章を塩田が執筆した。

# 1. 放送の中の美化語

# 1.1 「お|「ご|が付くことば

私たちは、日常生活の中で、「お天気」「お菓子」「ごあいさつ」など、名詞に「お」や「ご」を付けた言い方をよく使う。自分のことばを丁寧に見せ、ものごとを美化して述べるときに使うことから、「美化語」と呼ばれる¹¹。「お」が付くことばには、「お車」や「お帽子」など、相手を高めて言うときに使う「尊敬語」もあるが、「美化語」は、自分自身のことばづかいを上品にするためのもので、通常、相手に関係なく使われる。例えば、「酒」では、ぞんざいすぎて自分のことばにそぐわないと感じる人は、相手がいるいないに関係なく「お」を付けて「お酒」とする

ことで、自分のことばを上品に見せようとする。 「美化語」は、いわば自分自身のことばの"身だ しなみ"のようなものだとも言われる(尾崎喜光 2009)。

「美化語」には、「お」を付けても付けなくても 印象があまり変わらないものもあれば、「お」が 付かないと、 ぞんざいな印象を与えるものもあ り、その感覚には個人差がある。 男女によって も違い、一般的に女性のほうが「美化語」を多く使う傾向にある。 また地域差があって、 東京 近辺や関西の人は、「お」をよく付ける傾向があ る。 さらに学歴や職業による違いもある (井上 史雄 2007)。

そして、この「美化語」としての「お」「ご」の 使い方は年々、拡大している。やたらと「お」を 付けたがる現象を漬け物に見立てて"おやたら づけ"と呼び、批判する声も強い。最近の敬語 解説書にも、「お」「ご」の乱用に注意を促すも のが多いが、その背景には、「お」「ご」の使用 が拡大し、判断がますます難しくなっている実 態があるものと思われる。

## 1.2 美化語をめぐる先行研究

どのようなことばに「お」「ご」が付くのかについては、戦後まもなく、まとまった調査が行われ、「お」の付く語と付かない語の傾向が示された(柴田武 1957) $^2$ )。また、文化庁は、『国語に関する世論調査』の中で、過去2回(1997年と2006年)、「お」の付け方をたずねている $^3$ )。その結果分析から、およそ10年を経て「お」が増え、今後も増加傾向にあること、また、大人になってから取り入れる傾向があることも明らかになった(井上史雄 2009)。

また、井上史雄の一連の研究(2010・2011・2012a・b)では、相手との関係によって、

「お」の付き方に違いがあることや<sup>4)</sup>、「お」の使用は、まず女性が身近な語に付けるところから始まり、使用率を高めて、ついには男性まで巻き込んで「美化語」として定着し、その過程には幼児語も関連していることが示された。

## 1.3 放送の中の美化語の基準

では、放送の中で、「美化語」は、これまでどのように扱われてきたのだろうか。

NHKでは、戦後数回にわたって、「お」を乱用しないことを目的に、放送の基準を作るため議論を重ねた経緯がある。1947 (昭和22)年に出された『用語研究会報告』5)を見ると、敬語の乱れを指摘する文章の中で、「ていねいすぎることば」として以下の例が紹介されている。

- ・「<u>お熱</u>が出ましたら<u>お医者</u>をお呼び致しましょう。」 (『スポット・ニュース』)
- ・「<u>お野菜</u>の<u>お値段</u>を申し上げます。」 (『配給だより』)

用語研究会では、いずれの「お」も全く不要 であると指摘しており、当時の問題意識をうか がい知ることができる。

1952 (昭和27) 年, 国の国語審議会によって「これからの敬語」<sup>6)</sup>が出され, 戦後の民主主義社会における, 平明・簡素でわかりやすい敬語のあり方が示され, NHKでも, その方針に沿う形で独自に基準が作られた。1955 (昭和30) 年の放送用語調査委員会(現在の放送用語委員会にあたる)の決定では, 原則として"「お」は付けないことが望ましい"としたうえで, "接頭辞「お」の付く語と,「お」を付けずに済ましうる語"として, 約180のことばについて, 使い方を示している<sup>7)</sup>。

しかし、この基準は、ラジオのアナウンスの 場合を想定して決めたものであったため、その 後、テレビによって敬語を使用する場面が複雑 になってくると、放送の基準としては実情に合わない面も出てきた。1967 (昭和42)年度のテレビニュースの調査結果では、前出の"「お」を付けずに済ましうるもの"とされたことばに「お」を付けた用例がかなり多いことがわかり、また、基準に示されていないことばにも、「お」を付けているケースが多く指摘された<sup>8)</sup>。

個別の語について、新しい基準を作ることも 提唱されたが、一語一語について、「これはよい」「これは悪い」という細部にわたる基準を作 ると、かえってそれにとらわれて、実際の放送 では、悪影響を及ぼすことも懸念された。

こうした経緯を踏まえ、現在、NHKでは、「お」の付くことば=「美化語」について、次のような目安を示している。

#### 「お」の付くことば

物事を丁寧に言うために付ける「お」は、できるだけ省いたほうがすっきりした表現になる。 (NHK 放送文化研究所編『ことばのハンドブック第2版』より)

# 1.4 実際の放送での美化語

実際の放送の現状はどうなっているだろうか。世の中の「お」の拡大を背景に、実際の放送でも、「美化語」は、料理番組やインタビュー番組などの自然なやりとりの中では、かなり使われている。一方、公平公正な立場から簡潔に伝えることが求められるニュースの現場では、"「お」はできるだけ省くほうがよい"という原則は、比較的守られてきたといえるだろう。しかし、2012(平成24)年、仙台で開かれた放送用語委員会では、放送現場から以下の質問が出され、議論の対象になった。

Q. ニュース原稿やリポートでは, 「お客」では

なく「客」を使うことになっている。なぜ、「お客」 ではいけないのか。 冷たく不遜な感じで違和 感がある。

質問者が問題にしているのは、これまでのニュースの方針、つまり"「お」や「ご」はなるべく排除する"というやり方が、逆に視聴者に違和感を与えてはいないか、という点であった。放送現場、特に、ニュースの読み手であるアナウンサー(特に女性)は、名詞に「お」を付けないことで生まれる違和感を多かれ少なかれ経験していると思われる。例えば、「客」のほかに、「金(かね)」「正月」「酒」「土産」「腹」なども、ニュース原稿には、しばしば「お」を省いた形で登場し、以下のような感想を持たれることも多い。

テレビの女性キャスターが、汚職事件の報道などで「カネの流れを追っています」などというと、思わず画面の顔を見てしまう。ふだんなら「オカネ」というと思われる女性アナである。(中略)「カネ」は、ちょっと乱暴な感じである。

(井上史雄 1999『敬語はこわくない』より)

ニュースの現場では、戦後の民主主義にふさわしい放送敬語のあり方を模索してきた。中立的で簡潔なニュースを追求すべく敬語の簡素化を進めてきた結果、仮に「乱暴」で「冷たく」「不遜」な印象を与えているとすれば、ニュースの中の「美化語」の扱い方を見直す必要があろう。

そこで今回の調査では、用語委員会で取りあげられた、「客」あるいは「お客」ということばが、視聴者にはどのように受け止められるのか、また、ニュースの内容によって、その受け止め方に違いがあるのかどうか調べるため、2つのニュースに関して質問を設定した。

## 1.5 調查結果

今回の調査では、アナウンサーがニュースで使うことばとして、「お客」と「客」で、どちらがよいと考えるか、また、ニュースの内容や場面によって、その受け止め方が変わるかどうかを探るため、内容の違う2つのニュースの中での使い方をたずねた。

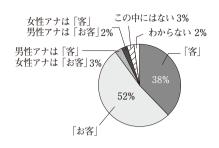
Q.ニュースでの表現について、うかがいます。 アナウンサーが話すことばとしてお考えください。この2つの言い方について、お考えにもっとも近いものを1つだけ選んでください。

- (ア) 競り落とされたマグロが, 築地のすし 店でさばかれ, 【a. 『客』b. 『お客』】に 提供されました。
- (イ) 飲食店にワゴン車が突っ込み,店の 【a. 『客』b. 『お客』】などあわせて7人 がけがをしました。
  - 1. aのように表現するのがよい
  - 2. bのように表現するのがよい
  - 3. 男性の場合にはaだが、女性の場合 にはbで表現するのがよい
  - 4. 女性の場合には a だが、男性の場合 には b で表現するのがよい
  - 5. この中にはない
  - 6 わからない

(ア)と(1)のニュースとも,実際のニュースを参考に設問を作成した(7)。選択肢の(3)と(4)は,アナウンサーの性別の要素も入れ,ニュースの読み手が男性か女性かで判断が分かれるかどうかも探ることにした。

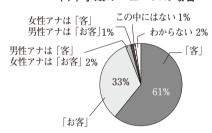
調査結果を見ると、まず、(ア)のマグロの ニュースでは、読み手のアナウンサーの性別に 関係なく「お客」と言うほうがよいと答えた人が 5割を超えている(図1)。

#### 図1【「客」か「お客」か】 (ア)マグロのニュースの場合



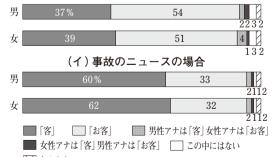
一方, (イ) の事故のニュースでは、アナウンサーの性別に関係なく「客」のほうがよいと考える人のほうが多く、6割を超えている(**図2**)。

#### 図2【「客」か「お客」か】 (イ)事故のニュースの場合



次に、回答者の男女別の割合を見ると、(ア)のマグロのニュース、(イ)の事故のニュースともに、「客」あるいは「お客」のほうがよいと答えた人の割合に、男女差はほとんどないことがわかる(図3)。

図3 【「客」か「お客」か】回答者 (男女別) (ア)マグロのニュースの場合



一般的に、「美化語」は、女性のほうが使う傾向にあるといわれる。2008 (平成20) 年度の「ことばのゆれ調査」でも、放送でアナウンサーが使う「美化語」について、"「お」のつくことばを「おかしくない」と考える人の割合は、男性よりも女性のほうが多い"という結果が得られた<sup>10)</sup>。しかし、今回の調査では、女性の回答者のほうが「お客」を支持する傾向は見られなかった。

49歳以下と50歳以上とで回答の傾向の違いを見たところ、後者では「お客」を選ぶ割合が相対的に大きいことが、(ア)(イ)に共通して観察された。

また、学歴による違いもあり、(ア)(イ)のいずれのニュースとも、大学卒業の人に「客」を選ぶ傾向がやや強く見られた。

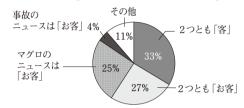
さらに、前出の設問のうち多数を占める、選択肢1(「客」のほうがよい)と2(「お客」のほうがよい)と答えた人に特に注目して、その回答のパターンを次の4つに分類してみた。

- (ア)のマグロ、(イ)の事故の2つのニュース について。
- A 2つのニュースとも「客」
- B 2つのニュースとも「お客」
- C (ア)は「お客」だが(イ)は「客」
- D (ア)は「客」だが(イ)は「お客」
- (E その他)

Aは、(ア)のマグロのニュース、(イ)の事故のニュースともに「客」を選んだ、いわゆる"「客」支持派"であり(33%)、ニュースには、「お」は必要ないと判断している可能性が考えられる。一方、Bは、2つのいずれのニュースとも「お客」を選んだ"「お客」支持派"であり(27%)、ニュースの内容にかかわらず「お客」のほうがよいと判断している可能性が考えられる。そして、CとDは、ニュースの内容により使い分けをすることを

選んだグループである。このうち、Dの、マグロのニュースでは「客」だが事故のニュースで「お客」がよいとする人は、4%と少なく、Cの、マグロのニュースでは「お客」だが事故のニュースでは「客」がよいとする人が25%となっている。A、B、Cでほぼ3つに分かれる形になった(**図4**)。

図4 【2つのニュースの支持傾向】



## 1.6 調査結果の分析

今回の結果では、(ア)のマグロのニュースで「お客」のほうがよいと答えた人が、5割を超えた。その中には、ニュースの内容にかかわらず「お客」のほうがよいとする"「お客」支持派"と、事故のニュースは「客」のほうがよいが「マグロ」のニュースは「お客」のほうがよいとする人が含まれる。このことは逆に、マグロのニュースでは5割を超える人が「客」と言われると違和感を持つ可能性が高いということでもある。これまで、ニュースの現場では、「お」は、できるだけ省いたほうがよいとしてきたが、「客」に関しては、視聴者によっては違和感を覚えるおそれがあるという結果は、一考に値する。

さらに、2つのニュースを通して、「客」がよいか「お客」がよいかの判断の傾向を探ると以下の点が指摘できる。

# 1.6.1 3割は、ニュースの内容にかかわらず 「客」のほうがよいと考える

今回の調査で、マグロのニュース、事故の ニュースともに「客」を選んだ、いわゆる"「客」 支持派"は、もっとも多い33%だった。事実関係を伝えるニュースは、余計な感情をはさまず、中立的な表現で伝えてほしいという視聴者の意識の表れと見ることができよう。ニュースは、「お」を使わず伝えるべきだと考える人が依然として一定数いるということは、ニュースで「美化語」を使う際には、慎重さが求められることを示唆するものといえるだろう。

# 1.6.2 3割弱は、ニュースの内容にかかわらず 「お客」のほうがよいと考える

一方、マグロのニュース、事故のニュースと もに「お客」を選んだ、いわゆる"「お客」支持 派"は27%だった。このグループには「客」に ついて伝えるときには、ニュースの内容にかか わらず「美化語」の「お客」を使うべきだという 考えの人が含まれる。言いかえれば、「客」と いう言い方ではぞんざいだという意識があり. 「お」を付けることによって丁寧に伝えたほうが よいと考える層であると推測できる。美化語の 「お客」を使う理由の1つとしては、「客」の尊敬 語である「お客様 | ということばに対する社会 の意識があげられよう。「お客様 | は、「客 | に 対して呼びかける言い方であり、本来の、内と 外で使い分ける敬語のルールからすれば、客 がいない場所では「客」「顧客」でいいはずだが、 このルールが適用されなくなっているという指 摘がある<sup>11)</sup>。サービス業の接客マニュアルなど で、「客」は、目の前にいるいないに関係なく常 に「お客様 | と呼ぶように刷り込まれることで、 「お客様」を「美化語」として使う人が増えてい るという。こうした意識の延長線上で、「客」 ということばに対する抵抗感が増し、「客」より も「美化語」の「お客」のほうがよいと考えられ た可能性があるのではないか。「お客」を支持 する理由については、さらに考察が必要だが、 今後、この"「お客」支持派"がどのように推移 していくかが、ニュースにおける「美化語」を考 えるうえで重要だと思われる。

# 1.6.3 ニュースの内容や場面によっては, 「お客」のほうがよいとする人もいる

今回,事故のニュースでは「客」がよいが、マグロのニュースでは「お客」がよいと考える人も25%いた。ニュースの内容や場面によっては、「客」と「お客」を使い分けるほうがよいとするグループである。その理由としては、「客」ということばに内在する意味と場面での位置づけが考えられる。

まず、「客」を辞書でひくと、「①その人の家や 居所に、招かれたり用があったりしてたずねてく る人②金を払って、物品やサービスを求める人 | (『大辞林』第三版)とある。この意味からする と「客」は常に「主⇔客」「店⇔客」という関係 性の中で捉えられることばといえる。マグロの ニュースの中の「客」は、「すし店」の「客」であり、 「すし店」と「客」の間には、「サービスを提供す る側」と「提供される側」という、商売上の関係 が存在している。つまり、マグロのニュースで は、「客」は「すし店のお客様」としての機能を 果たしている。そのため、「すし店⇔客 | という 場面上の関係性から、「お客」のほうがよいと判 断する可能性もあると想像できる。この場合は、 「美化語 |というより、「店の客 |への何らかの"配 慮"の気持ちが働いているのであり、相手(こ の場合は「客」)をたてる言い方である「尊敬語」 の要素が強いともいえるだろう。

それに対して、事故のニュースの場面の「客」 は、「店の客」ではあるが、ニュースの内容から して、「店」と「客」の間の商売上の関係は重要 ではない。店で起きた事故のけが人の「属性」が、たまたま「店の客」だったのであり、「客」としての機能や関係性は問題外である。そのため、中立的に「客」として伝えてほしいという意識が働いたと考えられる。

これまでの原則では、"ニュースでは「お」はなるべく省く"としてきたが、今回の調査の結果から、ニュースの内容や場面、また、ことばに内在する意味によっては、「お」を付けるほうがよいと判断される場合もあることがわかった。

# 1.6.4 「お客」か「客」かの判断には、 男女差は見られない

一般的に、「お」の付くことばは、女性のほ うが多く使う傾向にあるとされる。しかし、今 回の結果では、2つのニュースを通して、"アナ ウンサーが男性の場合は「客」がよいが、女性 の場合は「お客」がよい"とした人は、わずか だった(マグロのニュース3%. 事故のニュース 2%)。つまり、「客」のほうがよいか「お客」の ほうがよいかの判断に、読み手のアナウンサー の性別はほぼ関係ないと言ってよい。また、同 答者の男女別の割合を見ても、2つのニュース とも、「客」のほうがよいとする人にも、「お客」 のほうがよいとする人にも、 男女比に目立つ差 はなかった。2つのニュースとも「お客」を選ん だ"「お客」支持派"(27%)に関しても、男女差 はなく、「美化語」の「お客」は、男女差がない 形で使われていると考えてよいのではないか。 ほかに、男女ともによく使われる「美化語」とし て「お金」「お風呂」「お正月」などがあるという 調査報告もある12)。こうした結果の背景には、 「美化語 | の使用が男性にも広がってきている ことがあげられよう。男性が料理や育児をする ようになり、男性の間にも、確実に「お」は広

がっている(井上史雄2012a)。"イクメン"が増え、女性だけでなく男性にも「お」の使用が増えてくれば、放送上の「美化語」の印象も変わってくることが予想される。今後は、男性による使われ方も視野に入れ、検討する必要があるだろう。

戦後の「美化語」に関する意識をさかのぼる と、前述の「これからの敬語」の基本方針では、 以下のように記されている。

女性のことばでは、必要以上に敬語または美 称が多く使われている(たとえば「お」のつけす ぎなど)。この点、女性の反省・自覚によって、 しだいに純化されることが望ましい。

当時は女性の「お」の付けすぎが問題化し、NHKの女性アナウンサーにも、「お」のつかないことば(「みそ」「しょうゆ」など)を意識的に使わせた時代があった(金田一春彦1978)。「お」の問題は、もっぱら「女性の問題」だった。しかし、時代とともに、男性にも「美化語」が広がりつつある今、もう一度、「お」の付くことばをとらえ直す時期に来ているともいえるだろう。

# 1.7 これからの放送の中の「美化語」

今回は、内容が違う2つのニュースの中で、 視聴者が「客」と「お客」のどちらがよいと考える かを探った。「客」ということば1つ取ってみても、 「お」を付けるか付けないかは、伝えるニュース の内容や場面、ことばに内在する意味や社会的 背景、また、ニュースの聞き手が伝え手に何を 求めるかなどによって、判断が分かれることが 推測できた。また、「お」を付けるほうがよいとす る場合でも、ニュースのとらえ方や個人のことば に対する感覚によって、「美化語」と「尊敬語」の 両方の使われ方が考えられることもわかった。 どのことばに「お」を付け、また「お」を省くのかの基準を作ることは非常に難しい。「お」の付けすぎは、従来の放送敬語の考え方にのっとれば、避けるべきであろう。しかし、その一方で、世の中の「お」の付くことばの動向を見極め、視聴者の感覚にあう放送を探ることも重要である。「美化語」を放送の中でどう扱っていくかを考えることは、新しい時代の放送敬語のあり方につながる1つの鍵になるとも言える。視聴者の受け止め方にも配慮した、「伝わる」放送をめざして、さらに研究調査を進めていきたい。

## 2. ら抜きことばの問題

まず、「ら抜きことば」の性質について考えて みる。きわめて単純に言うと、「ら抜き」が発生 する理由の一つとして、それによってある動詞 群(上一段活用・下一段活用・カ行変格活用) の可能表現を、はっきりと、なおかつ簡潔に示 すことができるようになる、ということが指摘で きる(塩田雄大(2001.3)(2001.4))。

現代日本語では、たとえば「読まれる」と言ったら(軽い)尊敬か受け身、「読める」であれば可能として解釈される。

[尊敬] この本は、もう<u>読まれ</u>ました?[受け身] この小説は、外国でもよく<u>読まれ</u>ている。

[可能] このホテルでは日本の新聞が読める。

これは、「読む」などの五段活用動詞では、 可能の意味であることを明確に表す専用の言い 方(可能動詞「読める」)が、現代語として広く 認知されているからである。

一方、上一段活用(「見る」など)・下一段活用(「出る|など)・カ行変格活用(「来る|)の動

詞では、こう単純にはいかない。

[尊敬] この資料は、もう見られました?

[受け身] この映画は、外国でもよく<u>見られ</u>て

[可能] このホテルでは日本のテレビが 見られる。

[可能]が [尊敬] [受け身] と同じ形になってしまっており、場合によって混乱を引き起こすことがある。たとえば野口恵子(2013) p.121 には、学生に「金曜日は十号館にいますけど、午後、来られますか」と言ったところ、「やだー、センセー。敬語なんか使わないでくださいよー」と返されたというエピソードが紹介されている。これは、話し手は「来られる」を [可能] の意味で発話したのに対して、聞き手は [尊敬] として受け止めてしまったことによるアクシデントである。

それに対して「ら抜き」は、[可能]以外の何 物でもないことを明確に示す。

「可能(ら抜き)]

このホテルでは日本のテレビが<u>見れ</u>る。 午後、来れますか。

世間では、「ら抜き」は避けるべきものとして 扱われることが一般である。それに対して、「ら 抜き」には上述のような一定のメリット・合理性 が認められるため、特に言語研究者を中心とし て「きわめて自然な言語変化である」「変化に抵 抗しても無駄だ」といった意見が示されることが よくある。それに対してさらに、別の言語研究 者からの反論もなされている。

こうしたことを考えるのにあたって、そもそもこの現象はいつごろからあるものなのか、またこれに対して「ら抜き(ことば)」という呼び方がなされたのはいつごろからなのか、といったことを、最初に押さえておきたい。

# 2.1 「見れる」などは、 いつから使われているのか

結論を先に述べてしまうと、方言としての使用は明治のころから報告されており、大正から昭和初期には東京の話しことばでも使われ始めて、書きことばとしての例も現れる。戦後になると急速に広まったが、こうした使用に対する否定的な見解は、戦中期にすでに現れている。そして「ら抜き(ことば)」という包括的かつ全般的な言い方は、昭和の末ごろに出てきて、平成になるとほぼ一般常識語に近い扱いを受けるようになった。

# 2.1.1 方言としての指摘: 1897 (明治 30) 年

現在の静岡県西部にあたる遠江の方言の文法を記述した資料に、当地では「逃げれる・受けれる」という言い方をするという記録が見られる。当該資料の著者の松下は遠江の出身である。「逃げられる・受けられる」と言うと遠江では「受動(受け身)」とまぎれるおそれがある、と記されている。

東京にて四段以外にはラレルを附して、逃ゲラレル、受ケラレルなどといへど、遠江にては 斯くいふときは受動と混ずることあり。ラレル をつめてレルといふ、逃ゲラレル、受ケラレル、 を逃ゲレル、受ケレル、といふなり。

松下大三郎(1897)『新訂 遠江文典』(『新訂日本 俗語文典 付遠江文典』(勉誠社, 1997)に再録) ※ 傍線は引用者による(以下同)

# 2.1.2 一般的な話しことばとしての指摘: 1899 (明治 32) 年

三矢重松 (1899)「口語の研究」 (『文法論と国語学』「中文館書店、1932]に再録)

ここでの「口語」は、「文語」に対するものだと示されている。ただし、著者である三矢の出身地 (現在の山形県鶴岡市)の母方言が混入した可能性も否定はできない。

可能をあらはすには第一活段にレル又はラレルを附す。読マレル,<u>逃ケレル</u>,逃ケラレルなとの如し。但しラレルは四段活にはそはず。読マラレルといはれぬがことし。

松下大三郎(1901)『日本俗語文典 第三版』 (『新訂日本俗語文典 付遠江文典』 〔勉誠社, 1997〕に再録)

この資料の題名にある「俗語」とは「口語」のことで、東京の中流社会で使われているもの、もっとも広く通じて将来標準語ともなりうることばを指している(上掲書p.2)。口語の話しことばでは「逃げれる」とも「逃げられる」とも言うことを示している。こちらも、松下の母方言が混入した可能性も否定はできない。

## 2.1.3 大正以降の状況

こうした言い方は、東京では関東大震災を契機として広まったものと考えられている。大震災とその復興期の社会変動・人口移動によって、さまざまな地域の方言的要素が東京(特に山の手)に多く流入した(田中章夫(1983)pp.307-308)。大正期には、正式な場面では使われないものの、「起きれる・受けれる・来れる」という言い方は世間でもなされていたようである。

被動の助辞「られる」の「ら」を省略して用るるのは「起きられる」「受けられる」「来られる」を略して「起きれる」「受けれる」「来れる」といふ類だ。上一段、下一段、カ行変格皆さう

なるが平易な説話にのみ用る厳粛な説話には 用ゐない

> 松下大三郎(1924)『標準日本文法』 (松下大三郎(1930)『改撰標準日本文法』 にも同様の記述あり)

また、次のように書きことばとしても現れるようになる。

ナニ,あの沢は裾まで<u>下りれる</u>なんてものじゃねえ。柳の葉でもこいて食ってら<sup>13)</sup>。

〔長野県小諸の牧夫の発話〕 島崎藤村 (1912(大正1)) 「千曲川のスケッチ」

またこれほど手入れしたその花の一つも<u>見れ</u> <u>ず</u>に追ひ立てられて行く自分の方が …

葛西善蔵 (1918(大正7))「子をつれて」

おまへだつて、そこから出ては<u>来れまい</u> 井伏鱒二 (1923(大正 12))「山椒魚」

外のもんの手前、<u>来れない</u>んだよ。 岸田國士 (1926(大正 15)年)「村で一番の栗の木」

人生はついに循環小数の中から<u>出れない</u>。 小林多喜二(1926)「日記(1926.6.7)」『小林多喜 二全集第七巻』

いいか、此処へ二度も三度も、出直して<u>来れる</u> ところじやないんだ

小林多喜二(1929(昭和4))「蟹工船」

銀作は一家を離れて<u>見れる</u>やうになってゐた 川端康成(1933(昭和8)) 「二十歳 |

中村通夫(1953)には、こうした言い方が東京生まれの「(山の手の「中流」ではなく)上流新生層」に使われていることに気付いたのが1928(昭和3)年であり、終戦後に急速に広まった旨が示されている。そして戦後のNHKラジオ放送では、ニュース・気象通報の例は報告されていないものの、1951(昭和26)年のニュー

ス解説番組での「立って<u>いれる</u>子供」という例 や、クイズ番組「二十の扉」(1947(昭和22)年 開始)で出演者が「それは屋外でも<u>見れ</u>ますか」 「肉眼で<u>見れ</u>ますか」といった言い方をよく使っ ていたことが、同報告で指摘されている。

1949 (昭和24) 年に国立国語研究所で実施した調査の質問項目には、「来(ら)れない」「食べ(ら)れない」の使用に関するゆれを東京在住の147人および544人に尋ねたものが含まれている(国立国語研究所(1951))。これは、実態調査としてはおそらく最初のものである。

1950 (昭和25) 年には、新聞の見出しに「見れる」が使われた例がある。



朝日新聞(朝刊)1950年9月12日

1952 (昭和27) 年には、「来れる」を掲載した 国語辞典が登場する。

これる② [来 (來) れる] (自下一) [俗] 来る ことができる。

金田一京助編(1952)『明解国語辞典(改訂版)』三省堂

## 2.1.4 非標準的であることの指摘

神田寿美子(1964)や田中章夫(1983)・井上 ひさし(1992)・新野直哉(2012)などで示され ているとおり、こうした言い方が非標準的であ るとする指摘が、1943(昭和18)年に見られる。 【「現代語の美と正確とを破壊するがごとき語彙、語法」の例示として】

出来るといふ意味の場合「られる」といふべきところを「れる」といふ人が相当多く、しかも知識人の書いたものにまで屡々このやうな用法が現れる。例えば「駈けられる」を「駈けれる」、「綴じられる」を「綴じれる」。

(『日本語』3-6(1943.6)に掲載)

これ以外にも次のような指摘があり、終戦より前の時期に「誤用意識」が一部で生まれていたことが推測できる。

地方によつては、ラ行下一段活用の語尾を、 四段活用以外の未然形に附けて可能の意味 を表すに用ひるところがある。例へば

<u>起きれ</u>ない。 <u>見れ</u>ます。 <u>受けれる</u>。  $\underline{C}(x)$  <u>れる</u>。

の如くである。これは或は、可能の助動詞の「れる」が四段活用の未然形に限つて附くのに、四段活用以外にも附けるやうになつたものかも知れぬが、とにかく標準的な言ひ方ではない。

※ 傍線は原文のとおり 湯澤幸吉郎 (1944)『現代語法の諸問題』

下記は、視聴者からの投書を1964(昭和39) 年の放送用語委員会で議題にしたものである。

「午後の散歩道」で「<u>見られ</u>ます」を「<u>見れ</u>ます」 といった。

… 現在では投書の指摘のように「見れる」という言い方を耳にすることもあるが、放送のことばとしては適当とはいえない。

※ 傍線は原文のとおり (番組研究部用語研究班(1964)「放送用語メモ(18)」 『文研月報』14-11 に掲載)

なお, 五段動詞から派生した可能動詞に「れ」 を加えた「れ足すことば」は, 「ら抜きことば」の 次の段階に来るものとして議論されているが(塩田雄大(2001.3), 井上史雄(2003), 辛昭静(2004), 佐野真一郎(2009)(2012), 松田謙次郎(2012)), 次の例はこれに対する抵抗感を示すものとして, かなり早い時期のものである。

「「あそこに車は置けれないよ」-よく言われる「着れる」「食べれる」の類には不感症になっていたのだが、「置けれる」ともなると、いかに鈍い私でも、"拒絶反応"を起す。」(教員、24歳、東京都)

1969(昭和44)年1月5日朝日新聞朝刊「声」欄

このように、「見れる・食べれる」などの言い方は、非標準的であると指摘されてから70年という、「ことばの乱れ」としては決して短くない歴史を持っており、年季が入っている。

;

# 2.1.5 では、「ら抜き」という呼び名は、 いつから?

現在では一般化した「ら抜き(ことば)」という言い方・術語は、それほど古くからあるものではないようである。この呼び名が定着する前は、たとえば中村通夫(1953)の論文タイトルにも見られるように「「来れる」「見れる」「食べれる」などという言い方」といったまわりくどい表現が用いられていた。

「ら抜き(ことば)」に近い言いまわしを用いた 例としては、次のようなものが挙げられる。

近頃では、東京においても、「見れる・着れる・起きれる」などの物言いをたびたび耳にするのである。こうした一連の可能表現をどう考えたらよいだろうか。「生きられる」・「寝られる」の規範的な言い方から、「ら」音を脱落させたと考えるのが当るのだろうか、…

宮地幸一(1953)

この種の可能動詞の成立については、種々の 説がある。可能の助動詞「られる」の「<u>ら」が</u> <u>省略された</u>約音として成立したものという考 え,… 神田寿美子(1964)

どうして必要な「<u>ら」を外す</u>んだろうと、私に おっしゃった。

1976(昭和 51)年10月9日朝日新聞朝刊 論壇

#### 「らの字欠語症」

1983(昭和58)年7月6日 東京新聞朝刊 投書見出し

「下りれない」などは「下りられない」の"ら"が 必要と思うが,近頃はとみに"<u>ら"が省かれる</u>。 1984(昭和 59) 年 6 月 21 日 朝日新聞朝刊 論壇

着れる・見れる・出れる・来れる… この"<u>れる"</u> 式会話が若年層に広まって久しいが、…

> 1984年12月『辞書にないことば面白読本』 主婦と生活社

よく指摘される「見れる」「食べれる」にして も、「ら」を落とすことで可能を受け身と区別 し、また発音もしやすくなるというすぐれた面 を持っているからこそ、ここまで普及した。

1986(昭和 61) 年 3 月 1 日 朝日新聞朝刊 投書

佐藤(亮一) 「レルことば」ですが、「着れる」は国広哲弥・中本正智両氏の調査結果(『東京語のゆれ調査報告』昭和59)によると、二十歳未満の人では五五パーセントくらいの人が「よく使う」と答えています。

1988(昭和 63) 年 3 月 「座談会 言葉の変化を めぐって」『「ことば」シリーズ 28 言葉の変化』

筆者が採集できた中では、次の例は「ら抜き」 という言いまわしを用いた初期のものである。

#### 「ら」抜き言葉が気になる

… このごろ聞きなれたとはいえ気になるのが、テレビや日常会話での「見れる」「食べれる」などの「ら」ぬき言葉である。 …

1981(昭和56)年1月13日 毎日新聞朝刊 投書見出しおよび本文

そして1987 (昭和62) 年以降, 新聞紙面などでよく用いられるようになる。

.....

#### 『ラ抜き言葉』定着に憤りも

1987年1月12日 東京新聞朝刊 投書見出し 納得しがたい「ら」抜きの発音

1987年8月6日 読売新聞朝刊 投書見出し

#### ら抜き"れる" 言葉①

1987年9月2日 読売新聞朝刊(都内版)見出し

#### 聞き苦しい『ら抜き言葉』

1987年11月10日東京新聞朝刊 投書見出し

日本語の「乱れ」、「ゆれ」に関しては、近年様々な議論が行われている。国立国語研究所報告「大都市の言語生活」(昭和56年3月)の調査資料と分析にもある「見れる」、「起きれる」等のいわゆる<u>ラ抜き言葉</u>やアクセントの問題のほか、「学生する」、「青春する」等の言い方、外来語の氾濫、マンガ字の流行などが指摘されている<sup>14</sup>。

文化庁(1988)『我が国の文化と文化行政』

#### ラ抜き言葉

1989(平成元)年4月9日朝日新聞朝刊 コラム見出し

### "ら抜き" 言葉は改めよう

1989 年 8 月 24 日 毎日新聞朝刊 投書見出し "ら抜き"わが地では立派な言葉

1989年8月30日毎日新聞朝刊 投書見出し

「ら抜き」という言い方を言語研究者が一般 的に使い始めたのは90年代以降のようであり、 80年代の用例はきわめて少ない。

『読売新聞』連載の「東京ことば」は、「ガ行鼻音」、「サ行音の変化」、「東京新方言」、「ら抜き言葉」、「アクセントの変化」などの項目を挙げているが… 菅野謙(1988)

近ごろ、一部の方に評判の悪い言い方に「見れる」「着れる」「食べれる」などがあります。 もともとは可能を示す言い方として「見られる」 「着られる」「食べられる」でした。これらは「ラ 抜きことば」と言われるように、手っとり早く 「見れる」などと言い、その言いやすさから大いに拡がりました。 野元菊雄(1989.5)

「着れる」「見れる」のいわゆる<u>「ラ抜きことば」</u> も同様です。 野元菊雄(1989.8)

野元(菊雄) 「見れる」「着れる」といういわゆる<u>「ら抜き言葉」</u>は、まだ法則化はできていないと思います。

1990 年 4 月 「座談会 言葉遣いをめぐって」 『「ことば」シリーズ 32 言葉遣い』

放送については、1992 (平成4) 年7月17日 に放送されたNHK教育テレビ「ことばは変わる ~見られる・見れる、どちらが多数派?」 において、番組内のコメントで「ら抜き」という言い方が用いられていた。

この「ら抜き(ことば)」という言い方がほぼ「一般常識語」になったのは、1992(平成4)年9月27日付総理府発表の『国語に関する世論調査』の「調査結果」(文化庁(1993)に再掲)の公表がおそらくきっかけとなっている。この資料では、世論調査の結果の分析として「いわゆる「ら抜き言葉」についての意識」という項が立てられている。この発表内容をもとに、たとえば「「ら抜き言葉」若者は日常語」(1992年9月28日朝日新聞朝刊)などといった見出しを立てた記事が、新聞各紙に掲載された。また、『現代用語の基礎知識』1993年版(自由国民社、1993.1発売)の「風俗・流行」の欄には、「ら抜き言葉」が掲載されている(1992年版には載っていない)。

## 2.2 調査結果の分析

#### 2.2.1 全体傾向

まず,今回実施した5項目(「ら抜き」4項目,「れ足す」1項目[書けれない])の全体結果について見てみる。

「ら抜き」に関する先行研究からは、「拍数の少ない動詞ほど、『ら抜き』が出てきやすい」という傾向がほぼ一貫して現れている<sup>15)</sup>。これに従うならば、今回の調査項目での結果は、「ら抜き」を許容する順位に関して〔来れない〉食べれない〉数えれない〉確かめれない〕となるはずである。しかし、実際にはこのようにはならず、「来れない」に対する違和感〔=「変な言い方だと思う」〕が予想以上に高く現れた(図5)。問題文として回答者に提示した「8時までにはとても来れない」という文(過去の調査(後述)と同一のもの)の「とても」の用法が、近年の日本語としてはあまり耳慣れないものになりつつあるのかもしれない。今後の課題としたい。

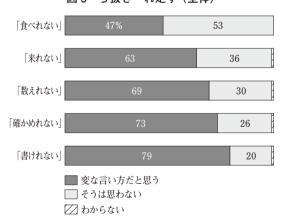


図5 ら抜き・れ足す(全体)

## 2.2.2 属性別傾向

まず男女別には、どの項目においても、「変な言い方だと思う」が男性よりも女性のほうが多いという傾向が現れている(図6)。「ら抜き」

に関して女性のほうが「厳しい/自制的」であるというこの特性は、「さまざまな言語意識に関して、女性のほうが規範的な回答をする傾向がある」という過去の諸研究での指摘と合致している。

図6 ら抜き・れ足す(男女別)

	「食べれない」	「来れない」	「数えれない」	「確かめれない」	「書けれない」
男性 〔571 人〕	55 44	37 61	33 66	72	21 78
女性 〔670 人〕	51 49	34 64	28 71	25 75	20 80

■ 変な言い方だと思う □ そうは思わない (%)

年代別に見てみると、「食べれない」以外の項目では、それほど差が大きく現れないことがわかる(図7)。これは一見奇妙であるが、のちほどあらためて取り上げる。

学歴別には、どの項目においても、非大卒者に比べて大卒者のほうが「変な言い方だと思う」が多い(図8)。これは、「『ら抜き』はいけ

図7 ら抜き・れ足す「変な言い方だと思う」 (年代別)

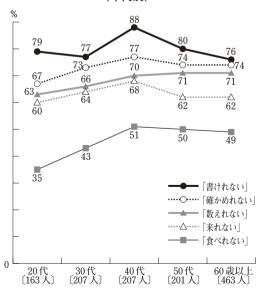


図8 ら抜き・れ足す(学歴別)

	「食べれない」	「来れない」	「数えれない」	「確かめれない」	「書けれない」
大卒 〔506 人〕	48 52	32 <sub>67</sub>	26 74	79	83
非大卒 〔731 人〕	56 43	38 60	33 65	30 70	22 77

■ 変な言い方だと思う □ そうは思わない (%)

ない」という意識の発生が、学校教育と何らか の関連がありそうなことを示唆する。

地域別には、もっとも際立った傾向として、 関東では他地域に比べて「変な言い方だと思う」がかなり多いことがまず指摘できる(図9)。 「ら抜き」はもともと地域性とは切り離して論じることができない問題であり、今後データを慎重に扱いつつ検討を加えてゆく必要がある<sup>16</sup>。

図9 ら抜き・れ足す(地域別)

	「食べれない」	「来れない」	「数えれない」	「確かめれない」	「書けれない」
関東 〔412 人〕	47 53	31 68	21 79	82	11 89
関東以外 〔829 人〕	56 44	38 61	35 64	30 69	25 74

■ 変な言い方だと思う ■ そうは思わない (%)

## 2.2.3 過去の調査との比較

今回とほぼ同内容の調査は、過去(1996年・2000年)にも実施している(加治木美奈子(1996)、塩田雄大(2001))<sup>17)</sup>。設問の文言等は、まったく同一である。ただし回答者の抽出方法に違いがあり、前2回は住民基本台帳を基にした層化二段無作為抽出法であるのに対して、今回はエリアサンプリングによる層化三段無作為抽出法である。なお質問項目に関して、1996年の回では「見れない」「行かれない」についても尋ねているが、「書けれない」は出題していない。

3つの調査結果を比較すると、1996年から 現在にかけて、「来れない」以外は、いずれも 「変な言い方だと思う」がわずかに少なくなって いる(図10)。ただし、さほど大きな変動では ない。

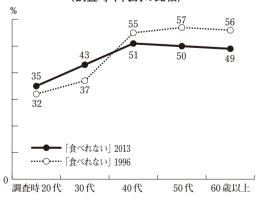
図 10 ら抜き・れ足す(過去の調査との比較)

	「食べれない」	「来れない」	「数えれない」	「確かめれない」	「書けれない」
1996年 〔1,251人〕	50 49	46 52	25 74	21 77	(調査なし)
2000年 〔1,429人〕	53 46	48 51	26 73	25 74	82
2013年 〔1,241人〕	53 47	36 63	30 69	26 73	20 79
■ 変な言い方だと思う □ そうは思わない (%)					

試みに「食べれない」について1996年と今回の結果を,調査実施時の年代別に比較してみると,年代差の傾きが,現在では緩やかになっていることがわかる(図11)。

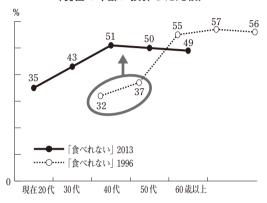
1996年の調査時に20代  $(20 \sim 29$ 歳) だった人は、現在では $37 \sim 46$ 歳になっている。この間の変化を見るために、**図11**での1996年調査の線を17年分右側にずらすと、中堅層(現在の $37 \sim 46$ 歳 (1996年調査時に20代)

図 11 「食べれない」は「変な言い方だと思う」 (調査時年代別の比較)



と47~56歳(同30代))では、「変な言い方だと思う」の回答率の「はねあがり」が起こっていることが見てとれる(図12)。つまり、この年齢集団では、17年間の間に「食べれない」に対する違和感が、増加したことになる。加齢によって、「保守的」になったのだと言える。

図 12 「食べれない」は「変な言い方だと思う」 (現在の年齢に換算した比較)



## 3. 規範意識にかかわる問題

現代の全般的な日本語の状況と、NHKでの日本語の扱い方をめぐる問題について尋ねてみた。

## 3.1 日本語は乱れているか

「非常に乱れている」が33%,「多少乱れている」が57%で、足し合わせると9割に達する(図13)。「多少乱れている」が主流で、「非常に乱れている」が二番手であり、乱れていな

図 13 日本語は乱れているか(全体)



いと感じている人は少数派である。これ以降, 特に「多少~」と「非常に~」の2つの回答に着 目してゆく。

男女別では、女性に「非常に~」が多い(図 14)。前章で示した「女性のほうが規範的な 回答をする傾向がある」に合致する。

年代別には、若い年代には「多少~」が多く、 年代が高くなるほど「非常に~」が増加するとい う傾向がおおむね見てとれる(図15)。60歳以 上では、両者はほぼ同率である。

なお、学歴別には大卒者に「多少~」が多く「非常に~」が比較的少ない(図16)。これは、年代差をある程度反映したもの(若い年代には大卒者が多いため)と考えておく必要がある。

図 14 日本語は乱れているか(男女別)

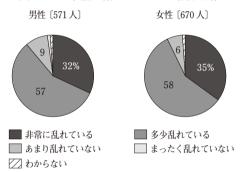


図 15 日本語は乱れているか(年代別)

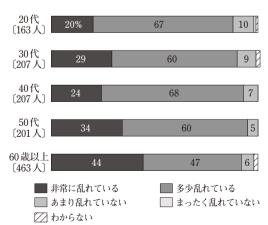
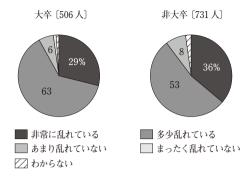


図 16 日本語は乱れているか(学歴別)



### 3.2 NHK の放送では…

NHKの放送におけることばづかいについては、今回尋ねた質問ではいずれも保守的な意見が主流である(図17)。

男女別には、女性のほうが保守的な意見が多い(図18)。さきほどの傾向と同様である。

年代別には、高年層になるほど保守的な意見が占める割合が高くなるという傾向はおおむね見られるものの、年代差としてはそれほど大きなものではない(図19)。特筆すべきは、「NHKの放送では、いわゆる『ら抜きことば』

図 17 NHK の放送では…(全体)

(流行に 左右されず)	67% 【保】流行に左右されず、あくまで本羽 【革】時代に合ったことばづかいを取り	
(ら抜き)	68 【保】いわゆる「ら抜きことば」は使れ 【革】「ら抜きことば」を使ってもかま;	
(模範)	71 【保】ことばづかいや話し方の模範をデ 【革】とくに模範を示す必要はない	17 12 示す必要がある
(話し方)	75 【保】読み方や声の出し方は、放送人と 【革】内容が伝わるのならば、それぞれのす	
		【革新的意見】 わからない

図 18 NHK の放送では… (男女別)

	(流行に左右されず)	(ら抜き)	(模範)	(話し方)
男性 〔571 人〕	22 63	18 64	19 69	18 73
女性 〔670 人〕	13 71	13 71	15 73	16 77

■【保守的意見】 □【革新的意見】 ■ どちらともいえない(%)

図 19 NHK の放送では… (年代別)

	(流行に左右されず)	(ら抜き)	(模範)	(話し方)
20代 〔163人〕	16 63	19 61	18 61	26 64
30代 (207人)	20 59	23 59	18 68	19 71
40代 [207人]	19 64	14 71	21 68	16 77
50代 (201人)	16 72	14 71	15 75	18 76
60 歳以上 〔463 人〕	16 71	11 72	16 75	13 80

【保守的意見】 【革新的意見】 [ どちらともいえない(%)

図 20 NHK の放送では…(学歴別)

	(流行に左右されず)	(ら抜き)	(模範)	(話し方)
大卒 〔506 人〕	18 67	13 76	15 76	13 81
非大卒 〔731 人〕	17 67	17 62	18 67	200 72

【保守的意見】 【革新的意見】 置 どちらともいえない(%)

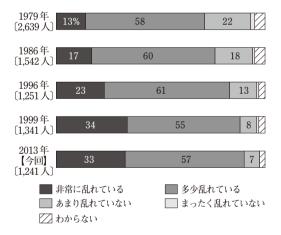
は使わないほうがよい」での年代分布で、ほかの項目と異なり40代以降になると【保守的意見】が急激に多くなる。「『ら抜き』はいけないものだ」という意識が、社会における中堅層において強化される傾向がありそうである。さきほどの図12での「加齢による保守化」とも関連する。

学歴別には、「NHKの放送では、流行に左右されず、あくまで本来のことばづかいを大切にすべきだ」では差がないが、それ以外の項目ではいずれも大卒者のほうが保守的な回答が多くなっている(図20)。

## 3.3 過去の調査との比較

「日本語は乱れているか」を尋ねた調査は、過去(1979年・1986年・1996年・1999年)にも実施している(文研・世論ことば調査グループ(1980)、石野博史(1980)、石野博史・稲垣文男(1986)、加治木美奈子(1996)、最上勝也・山下洋子(2000))<sup>18)</sup>。これらの結果を比較すると、「非常に乱れている」が年を追うごとに増えているようすがわかる(図21)。少なくとも意識の上では、「乱れ感」は年々強まっていると言える。

図 21 日本語は乱れているか(過去調査との比較)



また、NHKの放送におけることばづかいについての設問は、1996年にまったく同じ設問のものを実施している(加治木美奈子(1996))。比較してみると、全体としてはいずれにおいても「革新的意見」が減り、「どちらとも言えない」が多くなっているという傾向が見られる(図22)

図 22 NHK の放送では…(過去調査との比較)

	(流行に左右されず)	(ら抜き)	(模範)	(話し方)
1996年 〔1,251人〕	27 67	27 66	29 67	32 65
2013年 【今回】 〔1,241 人〕	17 67	15 68	17 71	17 75

【保守的意見】 【革新的意見】 [ どちらともいえない(%)

(Shioda (2013)) o

今回の調査結果で特に数字が大きく変わったのは、「NHKの放送では、読み方や声の出し方は、放送人としてきちんと訓練をすべきだ」という回答で、前回は65%だったのが今回は75%になっている。それに対して「内容が伝わるのならば、それぞれの持ち味で話せばよい」は、今回は17%(前回は32%)である。

## 4. 年代差に関する議論

ここでは、年代差についてあらためて取り上げてみる。2章・3章で取り上げた各項目での「保守的な回答」について、「49歳以下」と「50歳以上」にまとめなおして示したのが図23,24である。

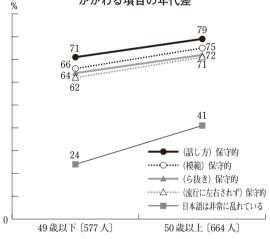
「書けれない」と「来れない」に関しては、「49歳以下」のほうが「変だ」が多い形になっている。「書けれない」については、「れ足すことば」が全国的にはまだそれほど浸透していないことがおそらく関連している。「来れない」については、前述のとおり「ら抜き」の箇所についてではなく、質問文の「とても(来れない)」という言い方に対する違和感が影響したのではないかと推測される。

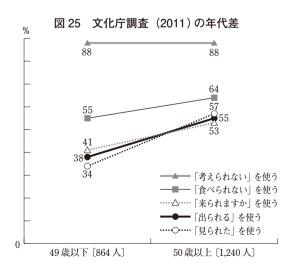
「食べれない」「数えれない」「確かめれない」 に関しては、「50歳以上」のほうが「変だ」が多 くなっている。とは言うもののさほど大きな年 代差ではなく、1~5%の範囲にとどまっている。

図 24 「NHK での日本語・日本語の乱れ意識」に かかわる項目の年代差

50歳以上〔664人〕

49歳以下〔577人〕





それに対して「NHKでの日本語」および「日本語の乱れ意識」にかかわる項目では、「50歳以上では保守的な回答が多い」という年代差が比較的よく現れている。「49歳以下」と「50歳以上」との差は8~17%程度である。

また、ふだん「食べられない」と「食べれない」のどちらを使うかということを尋ねた文化庁の調査(2,104人、2011年実施、文化庁(2011))の結果について、同様に「49歳以下」と「50歳以上」で集計し直してみたのが図25である。これを見ると、拍数の多い「考えられない/考えれない」においては若い層でも「ら抜き」語形があまり使われていないため年代差がないが、それ以外の項目では「50歳以上では保守的な回答が多い」という傾向がはっきりと現れている。

以上をまとめると、「ら抜き語形の使用意識 (文化庁調査)」と「NHKでの日本語、および 日本語の乱れ意識」では年代差が見られるが、 「個別のら抜き語形が変だと感じるかどうか」と いうことの判断をめぐっては、年代差はあまり 見られないということになる。

# 5. 「ら抜きことば」から見る, 日本語の変化 ~まとめにかえて

図24の「(ら抜き)保守的[=「NHKの放送では、「見られる」を「見れる」という、いわゆる「ら抜きことば」は使わないほうがよい」〕」の線と、図25を対照してみたい。「(ら抜き)保守的」の線(図24)は、「考えられない」以外のすべての「ら入り語形使用[=ら抜き語形不使用〕」の線(図25)よりも、上に位置している。つまり、「『NHKに対して全般的に"ら抜き"不使用を求める声の大きさ』は、『個々人の"ら入り"使用状況』に比べて、強い」ということが言える。自分

では「ら抜き」を使うけれども、NHKには使ってほしくない、という人が少なからずいることが読み取れる(塩田雄大(2009))。

これは. 放送に求める規範意識の高さという ことに加えて、「『ら抜き語形は変だと思うべき だ/答えるべきだ』という規範意識」による要因 もある。こうした規範意識は、マスメディア〔= 「『ら抜き』はまちがっています|〕や学校教育[= テストで「ら抜き」を使ったら減点される〕<sup>19)</sup>. ま た就職活動[=面接で[ら抜き]を使ったら不 利になる]を含めた社会経験などによって醸成 されるものだと考えられる。図23であまり年代 差が見られなかった〔=若い人でも、個々の「ら 抜き語形 | に対して変だと回答している] のは. この意識の存在と強く関連している。また、「日 本語は(非常に+多少)乱れている|と答える人 が9割を超えている実態は、こうしたことを考 えるのにあたって欠かすことのできない前提と なる。

このような規範意識は、日高水穂(2009)でも指摘されているように、言語変化としての「ら抜き」の進行を遅らせているものと予想される。

野田尚史 (1990) には、国立国語研究所が 1974年におこなった調査の年代別結果をふまえて「おそらく今から五〇年後には、ほとんどの人が「見れる」と言うようになっているだろう」「25年後には「見られる」は老人語? 200」という記述が見られる。執筆時点から換算すると、「五〇年後」は2040年、「25年後」は2015年である。はたして、2015年に近づいた現在、「見られる」は「老人語」となっているだろうか。

これは、少なくとも「ら抜きことば」については、調査時点での年代差、つまり「見かけの時間(apparent time)」から、「実時間(real time)」としての言語変化を正確に予測するのが

むずかしいことを物語っている<sup>21)</sup>。「ら抜き」は、 ある時点での年代差から予想されるよりも、進 行が遅い。

図12で見た「加齢による保守化」ともかかわるが、筆者は言語変化全般に関して、「自然な言語変化」を抑制するものとして「成人後の規範意識獲得」が働く余地は、一般的な想像以上に大きいのではないかと考えている。つまり、言語は言語として独立に変化したりするものではなく、そこには使用者である人間の「意識」が強く関与している。先述したように「違和感が指摘されてから70年」という歴史を持つ「ら抜き」は、その顕著な例である。

「ら抜き」をめぐる規範意識と、現在でも根強い違和感の醸成には、東京での「ら抜き」採用が他地域に比べて遅かった〔=東京の話者にとって「他地域の方言である」という意識が働きやすかった〕ことが遠因として働いているものと想像している。本稿では、関東では他地域に比べて「(ら抜き語形は)変な言い方だと思う」がかなり多いという形で調査結果(図9)に現れていたが、今後別稿であらためて論じてみたい。

「成人後の規範意識獲得」は、あらゆる言語 事象・言語変化に発現するわけではない。おそ らく言語変化のかなりの部分は、あまり気づか れることなく進行・終了してしまうのではないか と予測される(たとえば前稿(塩田雄大・山下 洋子(2013))で取り上げた、「唐揚げ」という表 記の増加、「事実を【知れて】よかった」という 言い方に対する許容性の増加などが該当すると 思われる)。

どのような言語事象が「成人後の規範意識 獲得」による変化抑制の対象となるのかを明ら かにすることが、今後の課題である。

(しおだ たけひろ/たきしま まさこ)

#### 注:

- 1) 文部科学省文化審議会答申(2007年2月)の「敬語の指針」では、敬語の形を、尊敬語、謙譲語 I、 誰譲語 I、 ていねい語、美化語に分類し、「美化語」とは、「ものごとを、美化して述べるもの」とし、「お酒」「お料理」などを例示している。
- 2) 柴田 (1957) では、NHK の『日本語アクセント辞典』(1951) に掲載されている 4 万 7,000語の 7 分の 1 を系統的無作為抽出で抜き出し、その中から特殊な語を除いて、4,830語を調査語とした。東京に住む 18 人の主婦を対象に、各語について「お」の付く程度を調査し、次の結果を得た。
  - ① 外来語には付きにくい
  - ②「お」で始まる語には付きにくい
  - ③ 長い語には付きにくい
  - ④ 悪感情の語には付きにくい
  - ⑤ 色・自然に関する語などには付きにくい
  - ⑥ 食事, 心の動き, 感情, 体の働きに関する 語には付きやすい
  - ⑦ 女性の日常生活ではあまり使わない語には 付きにくい
- 3) 2006年の調査では、調べた15のことばのうち、「お菓子」(73.3%)、「お酒」(56.9%)、「お米」(56.1%)、「お皿」(55.4%)、「お弁当」(51.6%)で、「お」を付ける人の割合が5割をこえた。1997年の調査と比較すると、「弁当」「皿」「酢」「薬」は、「お」を付けて言う人の割合が増加した。
- 4) 井上史雄(2010)では、ある卒業論文のアンケートのデータを再分析し、「お」の使い方の性差が大きいこと以外に、相手による場面差も大きいことを確認した。このデータは、調査語46語の「お」の付き方について、(上下・親疎)4種の相手による場面差を調べたもの。
- 5)「用語研究会」は、現在の「放送用語委員会」 にあたる、放送用語を研究する会で、当時、 部外委員として言語学者の金田一京助、土岐 善麿、岩渕悦太郎が参加していた。
- 6)「これからの敬語」(1952年5月)では、その基本方針について、「できるだけ平明・簡素にありたい」とし、「『お』『ご』の整理」という項目を立てて指針を打ち出している。(以下その内容)
  - 4. 「お」「ご」の整理
    - (1) つけてよい場合(略)
    - (2) 省けば省ける場合 女性のことばとしては「お」がつくが、 男子のことばとしては省いていえるも の。たとえば、「お」米「お」菓子「お」 茶わん「お」ひる
    - (3)省くほうがよい場合 たとえば、(お)チョッキ(お)くつした(お)ビール(以下略)
- 7) 筆者が確認できたのは、第323 回放送用語調査委員会の決定として『文研月報』(1955) に掲載されているものだが、『放送用語論』(1975) には、1951 (昭和26) 年にまとめられたものがあったと書かれている。その用例は、「行事そのほか」「きもの」「たべもの」「すまい」「道具」「生業」「人、そのほか」の7分野にわたる。

- 放送用語班(1957)『放送用語参考辞典』参照。
- 8) 菅野謙・竹田スエ (1974)「現代敬語と放送」によれば、「おさる」「おじぎ」「おしめり」「お城」「お正月」「お歳暮」「おたがい」「お天気」「お得意先」「おなじみ」「お墓」「お花畑」「お花児」「お祭り」「お礼」などの「お」をつけたことばが使われていた。
- 9)(ア)のニュースの文章は、2012年1月5日に『ニュース7』で放送された、実際に「お客」という表現が使われたニュースを参考にした。(以下は、そのニュースのリード部分「けさ、東京の築地市場で行われた初せりで、1億5000万円余りの価格がついたマグロが、さっそく、築地のすし店でお客に提供されました」)また、(イ)のニュースの文章は、過去に放送された事故のニュースを参考に、よく使われる表現を使って作文した。
- 10) 田中浩史・山下洋子 (2009) では、名詞に「お」 を付けたことばのうち、放送でよく使われる 10 のことばについて、アナウンサーが放送で 使った場合に「おかしくない」と感じるものは どれかを複数回答でたずねた。「お正月」では、 女性 87% に対して男性 80%、「お金」について は、女性 86% に対して男性 79% と、いずれも 女性の割合のほうが高かった。
- 11) 野口恵子 (2009) では、常に「お客様」ということばを使う人が増えていることを"「お客様」の絶対敬語化"だとし、「現代日本語の敬語は一部を除いて相対敬語だから、相手や場面などによって、同じ内容のことを言うのでも言い方を変える。(中略) 『お客様』にはこのルールが適用されなくなっているようなのだ」と指摘している。
- 12)『日本語話し言葉コーパス』を使って、通常の話しことばの中の「お客」の使用実態を調べた調査(相澤正夫 2006)によれば、「お客」は、「お菓子」「お寺」「お皿」「お城」「お土産」に次いで、「お」を付けて使われる頻度の高いことばであり、男女ともに同じ程度使われていることがわかった。ほかに、「お金」「お風呂」「お正月」などのことばも、使われる頻度が高く、男女比がほぼ同じだった。
- 13) ただし鈴木英夫 (1994) では、この文は「下りる」の誤植ではないかと疑念されている。
- 14) ただし、ここで掲げられている国立国語研究 所(1981)『大都市の言語生活 分析編』では、 「ら抜き(ことば)」に類する言いまわしは用い られていない。
- 15) たとえば渋谷勝己 (1993)や松田謙次郎 (2012) 参照。なお下記では、拍数の少ない「居(い)る」には「居れた」が用いられているが、「信じる」「答える」については「信じれず」「答えれず」とはなっていない。「ら抜き」と「ら入り」が一つの歌詞の中に同居している例である。

サヨナラさえ 上手に言えなかった Ah あなたの愛を <u>信じられず</u> おびえていたの (中略)

何んにも言えず ただ 泣いてるだけで 本当の気持ち いつでも 言えたなら そばに<u>居れた</u>ね ずっと サヨナラさえ 上手に言えなかった Ah あなたの愛に <u>答えられず</u> 逃げてごめんね (小泉今日子作詞「あなたに会えてよかった」 (1991年)) (下線は筆者)

- 16) 塩田雄大・山下洋子 (2013) の注 17 および注 20 参照。
- 17) 放送文化研究所が関連した調査で「ら抜き」を取り上げたものの報告としては、土屋信ー(1971),文研・世論ことば調査グループ(1980),石野博史(1980)などもあるが、これらは形式が異なるのでここには挙げなかった。
- 18) 1979 年・1986 年調査は全国 16 歳以上男女, それ以降の調査は全国 20 歳以上男女が対象。
- 19) 山本稔 (1982) によると、昭和 56 年版の中学校国語教科書には、「「見れる・出れる・来れる」などは、まだ、標準的な言い方として認められていない」(光村図書)、「「見れる」「来れる」などは、正しい言い方ではない」(東京書籍)などといった記述がある。
- 20) これは野田尚史 (1990) の本文に添えられたコラムの見出しである。コラム内では、「40年後の2015年ごろには、1974年に10歳代だった人たちが50歳代になっているので、2015年ごろの50歳代の「見れる」の使用率を同じ62%と仮定し、それ以外の世代の使用率も予測しグラフを作った」と、変動がなかったと仮定した場合での議論である旨が慎重に述べられている。また野田尚史(1991) p.97では、「たぶん、あと100年もしたら、みんな「見れる」「食べれる」と言ったり、書いたりしていると思いますよ」と、時期が延伸されている。
- 21) こうした視点は、たとえば横山詔一 (2011) や 高野照司 (2012) などでの重要な議論とも強 く関連する。

### 引用文献:

- ・相澤正夫(2006)「「お茶」から「おビール」まで 引ける"辞書"一利用者と提供媒体の見直しか ら一」『日本語辞書学の構築』
- ・石野博史(1980)「日本人の言語意識 I ことばの乱れ:その意識と実態」『NHK 放送文化研究年報』25
- ・石野博史・稲垣文男(1986)「ことばの意識調査報告 日本語はやはり乱れているか」『放送研究と調査』36-7
- ・稲垣文男・竹田スエ(1975)「アナウンサーと敬 語」『文研月報』25-10
- ・稲垣文男(1977)「これからの放送敬語 アナウンサーの敬語を中心に—」『NHK 放送文化研究 年報』22
- ・井上ひさし(1992)「「ら抜き」と「さ入れ」」『週 刊文春』(1992.10.22) (『ニホン語日記2』に再録)
- ・井上史雄(1999)『敬語はこわくない』講談社現 代新書
- ・井上史雄(2003)『日本語は年速一キロで動く』 講談社現代新書
- ・井上史雄(2004)「近ごろ気になる敬語の話」 『NHK 日本語なるほど塾 11 月号』
- ・井上史雄(2007)『その敬語では恥をかく!』P HPハンドブック
- ・井上史雄(2009)「言語変化の成人後採用―文化

- 庁世論調査による「お」の系譜―」『計量国語学』 27-3
- ・井上史雄(2010)「「お」の使い分けにみる美化 語の循環過程」『日本語の研究』6-4
- ・井上史雄(2011)『経済言語学論考―言語・方言・ 敬語の値打ち―』明治書院
- ・井上史雄(2012a)「美化語「お」の循環過程と 幼児語の「お」」『明海大学外国語学部論集』24
- ・井上史雄(2012b)「美化語の「お」と幼児語「お」 の全国分布」『明海大学大学院応用言語学研究』 14
- · NHK 総合放送文化研究所『放送用語論』(1975) 日本放送出版協会
- · NHK 放送文化研究所(1947)「第 56 回—第 68 回 用語研究会報告」『放送文化研究所所報』1
- ・NHK 放送文化研究所(1955)「放送用語の研究(9月)」『文研月報(10月)』5-10
- ·NHK 放送文化研究所(1957)『放送用語参考辞典(昭和31年版)』(部内資料)
- ・NHK 放送文化研究所(2005)『NHK ことばのハンドブック第2版』NHK 出版
- ・尾崎喜光 (2009) 『しくみで学ぶ!正しい敬語』 ぎょうせい
- ・加治木美奈子(1996)「"日本語の乱れ"意識は 止まらない〜第10回現代人の言語環境調査から (2)〜『放送研究と調査』46-9
- ・神田寿美子(1964)「見れる・出れる-可能表現の動き」『口語文法講座3 ゆれている文法』明治書院
- ・菅野謙・竹田スエ (1974)「現代敬語と放送」『NHK 放送文化研究年報』19
- ・ 菅野謙(1988)「マスコミと言葉の変化」『「ことば」シリーズ28 言葉の変化』
- ・金田一春彦 (1978) 「言語生活五十年の歩み」 『こ とばの昭和史』 朝日選書
- ・国立国語研究所(1951)「東京方言および各地方 言の調査研究」『国立国語研究所年報』1
- ・佐野真一郎(2009)「現代日本語のヴォイスに おける進行中の言語変化に関する数量的研究ー 「ら抜き言葉」、「さ入れ言葉」、「れ足す言葉」を 例として-」『Sophia linguistica』57
- ・佐野真一郎(2012)「日本語動詞可能形の変遷を たどる」『はじめて学ぶ社会言語学』ミネルヴァ 書房
- 塩田雄大(2001.3)「あなたはブタジル?トンジル?~平成12年度ことばのゆれ全国調査から(2)~」『放送研究と調査』51-3
- ・塩田雄大 (2001.4) 「「ら抜きことば」はヤメレナイ」 『放送文化』82
- ・塩田雄大 (2009)「NHK で「ら抜き」を使わない理由」『放送研究と調査』59-7
- ・塩田雄大・太田眞希恵・山下洋子 (2008)「『目線』『立ち上げる』も日常語に~平成 19 年度「ことばのゆれ」全国調査から~」『放送研究と調査』 58.6
- ・塩田雄大・山下洋子 (2013) 「"卵焼き" より"玉子焼き" ~日本語のゆれに関する調査 (2013年3月)から(1)~」『放送研究と調査』63-9
- · Shioda, Takehiro (2013) "Ranuki-kotoba, how strange are they?" Proceedings of Urban Language Seminar 11, 2013, Hiroshima.

- ・柴田武 (1957)「『お』の付く語·付かない語」『言 語生活』7月号
- ・渋谷勝己(1993)「日本語可能表現の諸相と発展」 『大阪大学文学部紀要』33-1
- ・辛昭静(2004)「「レ足す言葉」の使用率に影響する言語内的要因と外的要因 母語話者と日本語学習者の比較を通して 」『計量国語学』24-6
- ・鈴木英夫 (1994) 「「ら」ぬけことば-みれる,お きれる-」『国文学 解釈と鑑賞』59-7
- ・高野照司 (2012)「時間からことばの変化をさぐる」『はじめて学ぶ社会言語学』ミネルヴァ書房
- ・田中章夫(1983)『東京語 その成立と展開』明 治書院
- ・田中浩史・山下洋子(2009)「放送で使われる敬 語と視聴者の意識 平成20年度「ことばのゆれ」 全国調査から」『放送研究と調査』59-6
- ・土屋信一 (1971) 「東京語の語法のゆれ 児童生 徒言語調査結果報告 (2)」 『文研月報』21-9
- ・中村通夫(1953)「「来れる」「見れる」「食べれる」 などという言い方についての覚え書」『金田一博 士古稀記念言語・民俗論叢』三省堂
- ・新野直哉(2012)「昭和10年代の国語学・国語教育・日本語教育専門誌に見られる言語規範意識 副詞"とても"・「ら抜き言葉」などについて 」『言語文化研究』11
- ・野口恵子 (2009) 『バカ丁寧化する日本語 敬語 コミュニケーションの行方』光文社新書
- ・野口恵子(2013)『失礼な敬語』光文社新書
- ・野田尚史 (1990)「食べれる・来(き)ない・遊んだです システマチック化の兆し」『科学朝日』50-8
- ・野田尚史(1991)『はじめての人の日本語文法』くろしお出版
- ・野元菊雄(1989.5)「ことばの正しさ 「見れる」 の問題」『教育と情報』374
- ・野元菊雄(1989.8)「正しい日本語と簡約日本語」 『ESCS』11
- ・日高水穂(2009)「言語変化を抑制する誤用意識」 『日本語学』28-9
- ・文化庁(1997)『国語に関する世論調査』大蔵省 印刷局
- ・文化庁(2006)『国語に関する世論調査』国立印 刷局
- ・文化庁 (2011) 『平成 22 年度 国語に関する世 論調査 現代の国語をめぐる諸問題』 ぎょうせい
- ・文研・世論ことば調査グループ (1980) 「現代人 の話しことばー「ことばに関する意識」調査か ら」『文研月報』30-2
- ・松田謙次郎(2012)「日本語の攻防[文法]ら抜き言葉」『日本語学』31-15
- ・宮地幸一(1953)「移りゆく可能表現 近代小説 を中心として - 」『金田一博士古稀記念言語・民 俗論叢』三省堂
- ・最上勝也・山下洋子 (2000) 「放送は日本語にど ういう影響を与えたか ~ 「放送と日本語」全国 調査から~」 『放送研究と調査』50-3
- ・山本稔(1982)「話し言葉における「来れる」「見れる」「出れる」等の可能表現の実態と文法教育(1)」『山梨大学教育学部研究報告 第一分冊 人文社会科学系』33
- ・横山詔一(2011)「言語変化は経年調査データから予測可能か?」『国語研プロジェクトレビュー』6